

大聲して、猫の鳴しゆる、人々おそれおの、きみな小屋にあつまり、手に手に斧をかまへ、耳をすましてきけば、その聲ちかくにありときけば、又遠くに鳴とほしときけばちかし、あまたの猫かとおもへば、其聲は正しく一ツの猫也、されどすがたはさらに見せず、なきやみてのち、七人もの、おそるくちかくなきつる所にいたりて見るに、凍たる雪に踏入れたる猫の足跡あり、大さつねの丸盆ほどありしとかたりき、天地の造物か、るものなしともいふべからず、

〔倭訓栞前編二十三〕ねこ中略 諺に猫根性といふは、人の心の食欲を匿し、外に露はさぬ者をい

ふ、土佐國にしらが山あり、大山也、多く猫住て、獵人も至り得ずといへり、是はまたなるべし、鼠とる猫は爪を藏といふ諺は、説苑に、君子愛口、虎豹愛爪と見えたり、中略 猫の二歳にて死たりし兒に化て、母の乳を毎夜吸たりし事、奥州白川に有又妾に化し事、江戸にあり、歌に手かひの虎ともよめり、本草に、今南人犹呼虎爲猫と見えたり、猫に堅魚節あづけるといふ諺は、後漢書に、使餓狼守庖厨、飢虎牧牢豚といふに同じ、猫に小判見せるといふ諺は、野客叢書に、對牛彈琴といふ類也、但馬養父郡の一村に、猫をもて使とする社あり、農家蠶を養ふ節には、必其使を乞て鼠をかる、其使の猫は、社前の一拳石を持歸也、謝するに及び、又一拳石を隨ふ、よて小石丘壑の如しといふ、下略

靈貓

○按ズルニ、猫またノ事ハ、猿條狻猊ノ下ニ載セタリ、
〔和漢三才圖繪三十八〕靈貓じょうまう 靈狸 香狸 神狸類 俗云麝香猫中略

按、靈貓俗云麝香猫 咬啗ジガ吧カ及天竺有之、似猫大尾數品云 一種有麝香鼠出子鼠類 一種有麝香木、大明一統志云、真臘國有麝香木、其木氣似麝膺香、

〔重修本草綱目啓蒙三十四〕靈貓 ジャカウ子コ 一名香髦丹鉛錄 香狸泉州府志 鈴狸本草言

狐狸麝香藥性要 果狸廣東新語